和漢混淆文の和文語の受容についての一考察

――終助詞「かし」を中心に――

田中雅和

目次

はじめに
一、終助詞「かし」の意義分類
二、「かし」と「かな」との比較
三、「かし」の意義・用法の考察
四、「かな」の考察（補足として）
むすび

はじめに

中世の片仮名文は、和文体と漢文訓読文体とが混淆した文体という意味において、所謂「和漢混淆文」[1]（本稿では広義の和漢混淆文を指す。以下同様）であり、語彙の面からは、和文特有語と漢文訓読文特有語とが混淆したものである。この和文語と漢文訓読文語との位相については、語形を異にした対立関係（類義語の二形対立）を有する語彙上の対比でみることができる一方で、語形は同一でありながら、その用法に和文的である場合と漢文訓読文的である場合との差異を認め、語法上の対立関係[2]もあることが指摘されている。本稿では、後者、すなわち語法上の対立関係から和漢混淆文をながめ、和文（特有）語が和漢混淆文に受容される状況と、またそれを考察することによって、片仮名文を含む和漢混淆文の一性

格とを明らかにしようと思う。尚、本稿では後述する内容―終助詞を対象とする―の性質上、片仮名文だけを対象にするには用例が極めて少数であるため、平仮名文をも含めた和漢混淆文を対象とした。

漢文訓読文の一つの特徴として、助詞が和文に比べて豊かでないことが挙げられる。中でも終助詞については、その大部分が訓点資料には用例が見えない和文特有語であることが指摘されている。即ち、禁止の「な」、願望の「ばや・なむ・がな」、詠嘆或は強意の「な・かし」などがそれである。これらは訓点資料においては、禁止の表現は「ナカレ・ザレ・マナ」などで表わし、願望の表現は「ネガハクハ・コフ」などの用言で表わし、詠嘆や強意の表現は「カナ」などだけで済ましているもののようである。[3] それでは、和文資料には多く見られる終助詞が、片仮名文資料においてはどのような使用状況であるかを調べると、次の用例数が拾える。

法華百座聞書抄⇩がな（1）

三教指帰注⇩な（1）・ばや（2）

御物本宝物集⇩な（1）・ばや（1）・もがな（1）・かも（1）・かし（12）

草案集⇩ばや（5）・かし（2）

明恵上人夢記⇩ばや（5）

却癈忘記⇩な（2）・ばや（1）

光言句義釈聴集記⇩な（1）・ばや（3）・かし（1）

明恵上人行状（仮名）⇩ばや（1）・かし（2）

栂尾明恵上人伝⇩ばや（2）・もがな（1）・かし（4）

明恵上人伝記断簡⇩ばや（1）・かし（1）

以上のように、和文特有語と言われる終助詞も、片仮名文には量的には少ないながらもその用例を拾うことができる。

また、和文と漢文訓読文との両方にみられる終助詞「かな」は、片仮名文には少なからず用いられている（表Ⅰ参照）。

斯る状況をみるとき、文体の性質上漢文訓読文と和文との両者の性質を併せ持つ和漢混淆文において、そこで用いられる和文特有の終助詞については、次の点が注目される。つまり、和漢混淆文における終助詞が、語形上は和文と同一である場合、その意味・用法も和文脈で用いられる場合と全く同一であるかという点である。もしそこに差異が認められるとすれば、それは和漢混淆文が和文（特有）語を受容する際の、延いては和漢混淆文という文章様式そのものの一性格として特徴付ける価値があるものと考える。

片仮名文にもみられる和文特有の終助詞がいくつかあるのは先述の通りであるが、本稿では「かし」を中心にして検討することにする。その理由は、以下にも述べるが、和文と漢文訓読文とに共通して用いられる「かな」と、意味・用法上重複する部分が考えられるからである。

一、終助詞「かし」の意義分類

まず終助詞「かし」についての先学の論考[4]を参考にして、その解説を簡単に整理してみたい。

〔語源〕については、感動（或は森重氏は希望）を表わす「か」と強調指示「し」との複合と言われている。〔発生〕は平安時代以降であり、主として散文に使われた口頭語的なもので、中世に入ると用法は狭まったもののようである。[5]〔意味・用法〕についてはおおよそ次の三点に要約できる。

一、念押し・強調の意を表わす

二、勧誘・希望・命令・禁止の意を表わす

三、感動（詠嘆）の意を表わす

先学の指摘によると、「かし」の発生・変遷からみて、その消長の期間は比較的短いもののようである。斯る語が、正

にその消長の期間と重なる和漢混淆文にどのように受容されたかを考察することは、「かし」と和漢混淆文の性格を知る上で重要なことかと思う。また、意味・用法については「三、感動(詠嘆)の意を表わす」用法が、和文にも漢文訓読文にも用いられて専ら詠嘆の意を表わす終助詞「かな」と重複する可能性が推測できる。この場合、「かし」と「かな」との間に意義分担はなかったのであろうか。この意義分担の有無を検討することは、漢文訓読文では「かし」は用いず「かな」などだけで済ましているという指摘を考え合わせても、「かし」の性格を明確にする為に有効なことであると思われる。特に、和漢混淆文における「かし」の特性を考えるには重要なことであろうし、それを明らかにすることによって、先述の和文(特有)語の受容や文章様式の性格の一端も知り得るものと思う。

そこで、「かし」の特性をより明確にするために、以下では「かな」との比較において「かし」をみることにする。

二、「かし」と「かな」との比較

和文特有語「かし」の有する意味・用法や機能の総てが顕現するのは和文においてであると考えられるので、ここでは和文資料をも調査対象に入れて検討する。考察の便宜上対象とした資料を次のようにA・B・Cの三群に分けて示す。

A　片仮名文資料
B　A以外の和漢混淆文資料　　和漢混淆文
C　和文資料

まず、「かし」と「かな」の直上に接続する語を品詞別に分類し、その用例数を表I[6]として示す。「かな」についてみると、その用例の分布はA・B・Cいづれもほぼ類似しているようである。しかし、用例数に注目してみると、その割合がAとB・Cとでは特徴的に異なることが看取できる。即ち、A群の片仮名文では、B・Cに比べ、形容詞と形容動詞に直接付く用例数が極めて多いのである。そこでその内訳をみると、形容詞の場合「かなし・はづかし・をし・うら

表1

		A																
保元物語	計	明恵上人伝記断簡	高弁記	栂尾明恵上人伝	明恵上人神現伝記	明恵上人行状（仮名）	光言句義釈聴集記	三宝絵詞	却癈忘記	明恵上人夢記	草案集	御物本宝物集	三教指帰注	法華百座聞書抄	打聞集	資料／上接語		
																体言	かし	
8	4			1			1				2					動詞※(1)		
																形容詞		
																形容動詞		
2	1											1				助動詞		
17	17	1		3		2						11				助詞		
																副詞		
																感動詞		
22（14）	25			3（1）		1		1	2	1	1	7（2）	1（1）	2（2）	6（5）	体言※(2)	かな	
3	7							5				1		1		動詞		
5	39		3	7	3	10		13		1		2				形容詞		
	7					5		2								形容動詞		
1	9							3			1	3		1	1	助動詞		
																助詞		

※(1) （ ）内は、命令形以外の活用形に接続した例　※(2) （ ）内は、形式名詞に接続した例

	C										B						
	計	更級日記	浜松中納言物語	源氏物語	和泉式部日記	蜻蛉日記	落窪物語	大和物語	伊勢物語	土左日記	竹取物語	計	歎異抄	十訓抄	宇治拾遺物語	古本説話集	中世古写本宝物集	平治物語
1						1												
69	1 (1)	10 (1)	18 (4)	7 (1)	11 (1)	18 (3)	2	1	1		38		7 (3)	12	7	1	3
13	2	2	5			2			2								
4	1		3														
236	10	66	77	16	39	20	4	1	1	2	36		8	15	8	3	
105	5	43	21	4	6	22	2		1	1	66	3	9	15	4	5	13
8		1	3			4											
2			1	1													
201	8 (1)	36 (10)	79 (23)	11 (6)	18 (9)	37 (24)	4 (1)	4	2 (1)	2 (2)	213		27 (14)	108 (53)	20 (7)	14	22 (5)
134	7	17	50	1	19	17	12	4	2	5	24		7	4	4	6	
9		1	3	1	1	2			1		15	1				8	1
1			1								4		1			3	
157	4	26	38	16	15	27	13	10	5	3	33		1	8	9	14	
14	1		6		7												

めし・あぢきなし・うれし・かたじけなし・くるし・なげかし・なつかし・はしたなし」といった情意性形容詞が二六例、「よし・つたなし・たふとし・あやし・たのもし」といった情態性形容詞が一三例であり、形容動詞の場合も、情意性の「あはれなり・さいはひなり」が五例、情態性の「まことなり・たへなり」が二例である。つまり、A群の片仮名文における「かな」は、直上の品詞だけからみても、情意的内容を表現する際の感動を表出する為に用いられる終助詞であることが、B・C以上に明瞭にその特徴として把握できるのである。

一方、「かし」の方をみると、B群よりも漢文訓読文により近い性格を持つA群の片仮名文においては、「かな」に比べて「かし」の用例が極端に少ない。これは「かし」が和文特有語であることの端的な現われであろう。(7) また、C群の和文の場合に比べて、A・B群の和漢混淆文の場合は直上の品詞に偏りがあり、動詞・助動詞・助詞の三種類にしか接続していないことが看取できる。これは「かし」の接続の面からは、和文においては多種類の品詞に亘って接続しているのに対する、和漢混淆文における「かし」の或る特徴と考えられる。特に、副詞「さ」と感動詞「いざ」に付く例は和漢混淆文では皆無であり、こちらは和文における「かし」の特徴的用法といえる。

次に、「かし」にも「かな」にも、またC群の和文にもB群の漢文訓読文にも共通して多くの用例が拾えるのは助動詞に接続するものであるので、助動詞に注目して「かし」と「かな」のそれぞれの特性を確認してみようと思う。

「かし」と「かな」が接続する助動詞の分類による用例数を示したものが表IIである。表IIにおいては、「かし」の中で助詞「ぞ」を伴う「ぞかし」と、「かな」の中で形式名詞「もの」を伴う「ものかな」などは、その熟合の度合が極めて強く、一語に準ずる性質のものと考えられるので、斯る場合は助詞や形式名詞の更に上の語を対象とする必要があると判断した。従って、表Iで示した助動詞接続の用例数よりも表IIの用例数の方は増える結果となっている。表IIによると、「かな」はA・B・Cを通じて、「む・らむ・けむ・じ・まじ」などの推量の助動詞に接続することはないことが看取される。不確実な内容を伴った表現に「かな」を用いることはないのである。これは「かな」が正に詠嘆面だけを

担っているためであると考えて良いと思う。さらに言えば、「詠嘆」とは、確実な事や現在既に確定して動かせない、或は、現に進行している事実についての感動の表出であろうから、そういう内容を表現する助動詞「き・けり・つ・ぬ・たり・り」のような過去・完了・存続の意味を持つものは承けても、先の不確実な内容を表現する助動詞を承けることがないのである。しかし、同じ推量でも、眼前にあるものについての主観性の強い推量である「めり」や、主観的に必然性を持つと推量する「べし」のような助動詞を承けた例は存する。これは、発言された内容は主観的なものであって、話し手自身に向かう感動の表現[8]としての詠嘆の用法からはずれるものではないと思われる。これらのことは、言い換えれば、「かな」が単なる強意を表現する用法ではないことの現われであるとも言える。

一方、「かし」の方は、C群の和文では総ての助動詞に、A・B群の和漢混淆文でも四種類の助動詞を除き広く接続していることが看取される。この四種類の助動詞の中でも、特に「けり」を承けていない点が注目に値する。「けり」と同じく過去の助動詞である「き」には和文と同じように決して少なくない用例数がありながら、「けり」を承ける例は和漢混淆文には拾えないのである。和文においても、「き」と「けり」とを承ける場合の「かし」の関係も、斯る特徴と類似した傾向（「き」一六例に対して「けり」四例）が看取できる。これは「けり」が、「き」のような直接体験の過去ではなく、間接体験の過去を表現するのであって、そこに詠嘆的な意味あいも含まれる為ではなかろうか。また、このことは「かな」における「き」と「けり」との関係が「かし」におけるそれとは対照的に逆転しており（「かし」は「き」三一例・「けり」四例、「かな」は「き」一五例・「けり」一〇六例）、A・B・Cを通じて「かな」が承ける助動詞の中で圧倒的に多いのが「けり」（二七四例中の一〇六例・約四割）であるという事実も考え合わせると大変興味深いところである。即ち、「かし」と「かな」との表現機能・性格の差異が上接助動詞との関係に反映した顕著な事象であると考えられるのである。

以上の考察によって、「かな」は一般に（和文においても和漢混淆文においても）、詠嘆表現の機能だけを担うことが確

表II

資料	上接助動詞		A 計	明恵上人伝記断簡	高弁記	栂尾明恵上人伝	明恵上人神現伝記	明恵上人行状(仮名)	光明句義釈聴集記	三宝絵詞	却癈忘記	明恵上人夢記	草案集	類聚本宝物集	三教指帰注	法華百座聞書抄	打聞集	B 計	歌異抄	十訓抄	字治拾遺物語	古本説話集	中世写本宝物集	平治物語	保元物語	竹取物語	土左日記	伊勢物語
べし	か し																	2		1	1							
む			1											1				10		1	6	3				1		
らむ																		2			2							
めり																		1			1							
むず			1			1												1			1							
けむ																		10		5	1	3	1					
じ				1														5		1 2	1	1	1		1			
き			6	1		1		2						2				9			2	2	1	1	3			
けり																												
つ																										1		
ぬ																												
たり			4															8		3	1	1	1		2			
り			1																									
ず																											1	1
なり																		5			4	1						
る・らる																		2					1		1			
べし	か な		1												1			1				1						
む																												
らむ																												
めり																										1		
むず																		1			1							
けむ																												
じ																												
き															1													
けり			2	4									1	2		2		20		2	6	6	4		2	9	1	6
つ										2								16		3	6	3	2	1	1	2	2	1
ぬ																		9		1	2	1	3	1	1		2	
たり																		1			1							1
り																		2			1	1						
ず			1											1				11		1	4		4		2	2		
なり																		2					1 2	1				
る・らる																		1			1							2

	C								
総計	計	更級日記	浜松中納言物語	源氏物語	和泉式部日記	蜻蛉日記	落窪物語	大和物語
18	16		8	8				
77	66	5	24	11	3	12	10	
30	28	11	3	6	3	5		
22	21		2	11	5	1	2	
5	3		3					
32	22	2	3	7		9		1
34	29		21	5	4	7	1	1
31	16		2	7		2	4	1
4	4					2		2
9	9			5			3	
12	12	1	4	5		1	1	
20	8		2	2		1	3	
5	4					1	1	2
20	20		9	4	3		2	
29	24	2	15	5			2	
6	4		1	2		1		
29	27		10	9		4	3	1
4	4				1	2		
1								
15	14	2	1	3	3	1	3	1
106	77	1	15	20	9	5	15	5
34	16	1	2	2	1	3	3	1
20	11		2	3	1		1	2
11	10	1		3		2	3	
12	10		1	4		1	4	
23	10	1		1	3	3		2
13	11		1	2		3	5	
6	5			1	1			

認されたかと思う。一方、「かし」の方は、和文における場合は別として、和漢混淆文においては発言内容を感動的に表現するためには用いられなかった――つまり、「かな」と類似した意義・用法はなく、「かし」と「かな」との間には意義分担があった――のではないかと考えられる。

そこで、この点について更に検討する為に、次には終助詞「かし」がいかなる意味・内容を表現する際に用いられたかをみることにする。

三、「かし」の意義・用法の考察

終助詞「かし」の最も基本的な意義・用法は〝発言内容を強調する〟もので、「念押し・強調の意」が中心である。そして、その強調される発言内容が、相手に誂えるものである場合は「勧誘・希望・命令・禁止の意」となり、話し手自身に向かって強調する場合は、その中に「感動(詠嘆)の意」となるものがあると考え得る。従って、その意味・用法は先述したように三種類に分類できる。

ところで、その意味・用法の弁別であるが、主として命令形をうける勧誘・希望・命令・禁止や、単なる強調である念押しの表現の場合、その文意(表現内容)の区別は比較的容易であり、客観的にも弁別可能である。しかし、発言内容が

相手にもちかけられる「念押しの表現」（感動的な推量）と、発言内容が話し手自身に向かって再確認する「詠嘆の表現」（感動的な断定）とは、弁別が必ずしも容易ではない。例えば、次の如き例は、発言内容が話し手自身に向かうものであるが、自分自身に再確認・納得させる心が極めて強い念押しであって、詠嘆とは考え難い。

○京の子の日のことひいでつゝ、小松もがなといへど海なかなればかたしかし。〈土左日記〉

○我が念じ申す天照御神は内にぞおはしますなるかし。〈更級日記〉

それでは、先の両者の弁別は可能であろうか。本稿では両者を弁別しつゝ「かし」の意義・用法を明確にしようと試みるのであるが、その際、論者の主観的解釈によってではなく、より客観的に検証されねばならないと考える。

そこで試みに、その両者の差異を客観的に検証する一つの方法として、「かし」によって強調されるところの「自立語」に注目し、その整理を行なってみた。この方法の可能性について言及しておけば、まず、強調されるべき表現内容は、語としては助詞・助動詞や形式的な名詞・形式的な動詞ではなく、人物・事物や事柄、また動作、さらに形状・情態や情意であるので、自立語を対象にして整理することは、「かし」の性格を見極めるのに有効であると考えたからである。具体的には、―例えば、先の用例で、「かし」の発言内容が話し手自身に向かうものでありながら感動的表現（詠嘆）であり得ないのは、「かし」の承ける内容が「かたし」「おはします」と言った情意性のない語であることに依る所も大きいと考えるので―「かし」の承ける内容を示す語が動詞・形容詞・形容動詞の場合には、それらが形状・情態・動作性を有するもの（非情意性のもの）か、或は情意性を有するものかで分けて考えてみることにした。また、情意性を有する自立語を承ける「かし」が感動（詠嘆）の用法であると仮定して考察をすすめることにした。これらは基準としては必ずしも完全なものとは言えないが、表現内容を把握する上での基本的な性格を知るには有効であり、表現意図を把握する上でも大きな齟齬は生じないものと考える。その整理の結果が表Ⅲ[9]である。

名詞を承ける「かし」は、その多くが、

○いかでかくとだに告げ奉らんと思ふに、しづ心なくて「さて、いつか」といへば「今宵ぞかし」といふ。〈落窪物語〉

○「こゝはいづくとか申候」と問へば「などかくは問給ぞ。肥後国ぞかし」といへば、〈宇治拾遺物語〉

の如くに、応答の文においての強調表現で用いられ、そうでない場合も、

○ほど経て河原にものするに、もろともなれば「これぞかの宮かし」などいひて、人を入る。〈蜻蛉日記〉

の如き単なる強調表現で用いられる。しかも斯る名詞は単独で(連体詞以外の修飾語を伴わずに)現われることが特徴である。しかし、中には次の如くに連体詞以外の連体修飾語を伴う例がある。

○況我等はさすがに清和天皇の御末、八幡殿の正しき孫ぞかし。〈保元物語〉

この例では、「正しき」ことを訴え、強調するものであるので、「かし」によって意味上強調されるものは寧ろ連体修飾の語や句の方であると判断される。後にも触れるが、少なくともA・B群の和漢混淆文においては、この連体修飾語(句)は、形状・情態性のものばかりで、発言内容が相手に向かう強調表現であって、感動的表現と判断されるものはない。

動詞を承ける場合、その動詞は表Ⅰでも看取できるように、殆どが動作性動詞の命令形(全一一一例中命令形九七例、87%)である。従って、発言内容は相手に向かう勧誘・希望・命令・禁止か念押し・強調の表現が殆どである。しかし、命令形以外の活用形に下接する場合には、表Ⅲに示したように、他のものとは少々異質な情意性動詞六種を承ける感動的表現の用法八例が拾える。用例は次の通りである。

①さだしげが七十貫が質に置きし太刀共を(中略)古水干一つにかへたる物を、そこばくの物にかへてやみにけん、げにあきれぬべきことぞかし。〈宇治拾遺物語・㊀〉

②かたみをたづね出でば、やがてもむつびよりて心もなぐさむべきぞかし。〈浜松中納言物語・㊁〉

③いかなる人のもとにも、しばしは心よりほかに思ひ侘ぬやうあらじかし。〈浜松中納言物語・㊁〉

表III

資料	A		B	
語の性質 / 品詞	名詞	動詞	名詞	動詞
情意性のないもの	歌	あり・打つ・仰す・書く・蒙る・候ふ・知る・す・鍾愛す・善行す・尋ぬ・給ぶ・侍り・亡ぼかす・参る・見る・詠む	家主・祈・伯父・心・疵・事・最後・栖・尊卑・太刀・常・所・年・中・念仏・肥後国・人・孫・宮・者・奴・譲り・用・世の末・世の習・辺	明く・飽く・あり・預る・行く・射通す・言ふ・入る・要す・笑む・起く・怠る・恐る・落つ・おはす・追出す・生ひ立つ・思す・覚ゆ・思ひ寄る・思ふ・書く・固む・構ふ・軽む・切る・来・下る・暮る・下ぶ・心得・試みる・御覧ず・候ふ・退く・知る・す・勧む・散ろぼふ・付く・作る・通す・取る・成る・逃る・宣ふ・登る・外す・隔つ・参る・乱る・見ゆ・見る・破る・結ふ・依る・笑ふ・率る・居る
	形容詞		形容詞	
	なし		あぶなし・あやし・ありがたし・いみじ・うるせし・多し・正し・疾し・なし・深し・易し・らうくじ	
			形容動詞	
			優なり・大きなり・剛なり・異なり・異やうなり・遙かなり・わづかなり	
			副詞	
			かたみに・きと・切に	
情意性を有するもの	あさまし・心憂し		あきる	
			あさまし（3）・恋し	
			あはれなり（2）	
			名詞	動詞
			あはひ・有様・浦・伯父・かたみ・甲斐・神・君・顕證・子・心・心ざし・ことわり・此頃・こよひ・さいはひ・様・しぐれ・しるし・十五夜・宿世・ちぎり・除目・常の事・所・殿・なみ・日・光・人・身・宮・やど・ゆかり・世・忘れ・折	逢ふ・現はかす・あり・歩く・急ぐ・出て来・言ふ・いますかり・入る・得・失す・打つ・移ろふ・置く・送る・押さふ・教ふ・劣る・おはします・おはす・思し出づ・思し立つ・思し直す・思しやる・思す・思ひ知る・思ひつゝむ・思ひ残す・思ひ止む・思ふ・覚ゆ・隠す・慰む（2）・恨む（2）・思歎く・思ひ侘ぶ・思しうとむ

C		
	形容詞	語ふ・語る・叶ふ・返る・帰る・聞き入る・聞く・聞ゆ・興ず・下る・屈ず・消つ・試みる・懲る・御覧ず・殺す・候ふ・騒ぐ・敷く・死ぬ・滲む・知る・しろしめす・す・過ぐ・勝る・過す・捨つ・奏す・違ふ・立ちどまる・立つ・奉る・たばかる・倒る・給ふ・散る・仕うまつる・着く・慎む・問ふ・止まる・取る・ながむ・泣く・靡く・成る・似る・寝・のゝしる・宣ふ・はかる・果つ・憚る・侍り・経・更く・降る・ほむ・参る・申す・粉る・まさる・待つ・乱る・向く・ものす・任す・まじる・見ゆ・見る・迎ふ・柔らぐ・止む・許す・寄る・依る・忘る・渡る・笑ふ
	形容動詞	あながちなり・いたづらなり・艶なり・おろかなり・頼もしげなり・なかくなり・なのめなり・むげなり
	副詞	さ・さる・しばし
		あいなし・あやし・いとほし（4）・うれし・おそろし・おほけなし・恋し・口惜し（5）・苦し（2）・さうぐし・なげかし・情なし・なつかし・憎し・はづかし・ゆかし・ゆゝし（2）・をかし（2） あはれなり（5）・あやにくなり・不便なり・をかしげなり

「情意性を有するもの」においてのみ、複数の用例がある場合（一）にその用例数を示す。

④我が心のあまりけしからぬすさびに、かく恨みられ奉るぞかしと思し知らる。〈源氏物語　紅葉賀・思〉

⑤とさまかうさまに心み聞ゆるほど、いとゞ思しうとむなめりかし。〈源氏物語　若紫・話〉

八例中①の一例を除いては、和文における用例であり、しかも①の一例だけが地の文であって、他(和文)は思惟・会話の文中での使用例であることを指摘しておく。

次に、名詞や動詞の修飾語となっているものも含めて、「かし」が承ける形容詞と形容動詞について検討する。応答の文以外の多くの場合、「かし」によって強調されるべき内容の基幹となる部分をみることになる。この場合も、多くが形状・情態の表現に関わるものであるが、一部に情意の表現に関わる感動的表現とおぼしき用法の「かし」があり、それらは情意性を有する形容詞や形容動詞を伴っている。表Ⅲに看取できる通り、A・B群の和漢混淆文では四種七例、C

群の和文では二二種三二例[10]が拾える。以下その具体例を示す。

⑥安元二年ナムトモ、チカウハアサマシクコゝロヲウク侍リシコトソカシ。〈御物本宝物集・地〉

⑦ちかうは安元々年などもあさましく侍しとしぞかし。〈最明寺本宝物集・地〉

⑧蘇武が胡国にまかりて十九年まで古郷に帰らざりけんも、都は恋しく侍りけんかし。〈本能寺本宝物集・地〉

⑨深き海となりにければ、これをあざけり笑ひしものどもはみな死にけり。あさましきことなりかし。〈宇治拾遺物語・地〉

⑩蛇（中略）我身の切るゝをもしらず引きけん。あさましきことなりかし。〈宇治拾遺物語・地〉

⑪けしきばかり奥の方に碁石笥に碁石を入るゝおとす。御前にも昔思しめし出でゝあはれにおぼしけむかし。〈古本説話集・地〉

⑫はじめ置きたる講もけふまで絶えぬは、まことにあはれなることなりかし。〈宇治拾遺物語・地〉

⑬そのうた（和歌）いとをかしかし。〈土左日記・地〉

⑭六條わたりも解けがたかりし御気色をおもむけ聞え給ひて後、引き返しなのめならんはいとほかしかし。〈源氏物語　夕顔・地〉

⑮（和歌）と心のうちに思も、めざましうおほけなき事なりかし。〈浜松中納言物語・地〉

⑯故宮のおはします世ならましかばかやうにのぼらせ給はましなど人々いひいづる。げにいとあはれなりかし。〈更級日記・地〉

⑰いとをかしき君ぞかし。うち語らひて出入せんによき事かな。〈落窪物語・話〉

⑱立ち寄らるゝ事だにおぼろけにては有がたきが、本意なく口惜しき事なりかしや〈浜松中納言物語・話〉

⑲「……うちなげくめりしかば今のほど立ちやかへらん」と「他人よりはいとほしからんかし」と心あわたゞしくお

ぼさるれば、〈浜松中納言物語・思〉

⑳いかなる処なればそこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし処ぞかし。げにをかしき処かなと思ひつゝ、〈更級日記・思〉

㉑いと不便なりける事かな（中略）論なうえせ物に局おそひ敷かれむかし。あはれ不便なる夜なめりかし。〈落窪物語・話〉

⑥〜⑫は和漢混淆文における用例の総てであるが、この七例は「地の文」で用いられている点で共通している。和文にあるような「思惟の文」や「会話の文」で用いられる例はない。この種の特殊な「かし」の特徴的な用法は⑨⑩⑫の宇治拾遺物語にみることができる。いづれも一つのまとまった話題が一段落したところで、結びの作者の「評」として置かれた一文に用いられた例である。

和文における⑬〜⑯の例も情意性を有する語を承ける「かし」が「地の文」で用いられた例である。これらは或る話題や事物・人物に対する作者の「評」であって、情意的表現ではあるが、その発言内容は話し手自身に向かうものではなく相手にもちかけているのであるから、感動・詠嘆表現の用法とは言い難い。「評」として別のレベルで考えられるべきである。一方、和文において会話文や思惟文に用いられる⑰〜㉑のような「かし」は、発言内容が話し手自身に向かう情意表現であって、正に「かな」の用法と類似した感動・詠嘆の用法であると言える。それは⑳の例の如くに、同一人物による一つの思惟文の中で、同一の場所である「処」を、「ゆかしく」も「をかし」くも思うという情意表現の際に、「かし」と「かな」が並立的に用いられていることからも充分に窺い知られる。更に、これまでの考え方から、次の例も感動（詠嘆）の用法としたのであるが、「かし」の存在だけでなく、その一文の後に、「あはれになみだぐましく思さるゝ御心」といった前文（思惟文）の説明があることからみても、この思惟文における「かし」は感動（詠嘆）の用法とみなし得ると思う。

○御らんずるたびごとに「心にかゝりてゆゝしくおぼつかなく思かたの人ぞかし」とあはれになみだぐましく思さるゝ御心の……〈浜松中納言物語・㊀〉

そこで、表Ⅲにおける情意性を有する語を承ける「かし」の四七例について、地の文での例か会話や思惟の文での例かを確認すると次のようになる。第一に、和漢混淆文の例はその総てが「地の文」で用いられていること（①・⑥～⑫の用例）。既に言及したように、これは情意性の語を承けた表現ではあるが、感動（詠嘆）の用法ではない。つまり、和漢混淆文においては、「かし」に詠嘆の用法はないと判断される（本稿でのこれまでの判断基準からだけでなく、主観もまじるが、総合的に文脈等からその表現内容を検討しても、管見では詠嘆の用法と判断し得るものはない）。第二に、和文においては、「地の文」で用いられた「評」の用法も存するが、「会話・思惟の文」で用いられた詠嘆の用法があることが特徴的である。「かし」が詠嘆の用法を有するのは、和文においてのみの特徴であることが指摘できる。

	地の文	会話思惟の文
A	1	0
B	7	0
C	14	25

四、「かな」の考察（補足として）

終助詞「かな」は、近世以降疑問表現との関係が認められることを除外すれば、詠嘆の意味をのみ有すると考えてよい。[11] そこで、「かし」の感動（詠嘆）表現の性格を、より明確に把握するために、また、表Ⅲで行なった上接自立語による分類がどの程度有効であるかを確認するために、「かし」について行なった表Ⅲと同じ分類基準で、「かな」が承ける語の分類を行ない参考に資したい。表Ⅳがそれである。和漢混淆文と和文とのそれぞれの特徴的な部分が顕現すればよいと考えるので、A群は総ての、B群からは『宇治拾遺物語』の、C群からは『浜松中納言物語』の用例について検討する。

本稿で検討対象とした資料における「かな」の用法は総てが詠嘆の用法である。その中で、「かな」の承ける語が情意性を有するものであるのは、A群で八七例中の五〇例（57％）、宇治拾遺物語で一二〇例中の八〇例（67％）、浜松中納言物語で八〇例中の五三例（66％）である。勿論、「かな」の場合総てが詠嘆の用法であるが、必ずしもその一文の中に直接情意性を有する語が用いられているとは限らない。例えば次の如き例がある。

○涙おとしての給を、いとあはれと見て「知らぬ人のはづかしうおはするに、思ひもかけず見ゆるかな」とあさましながらもいふかひなくまた頼むかたなく、見馴れたてまつりぬる心ちして……〈浜松中納言物語〉

この場合、「かな」が承ける語の中に情意性を有するものはない。しかしこの一文（思惟文）が詠嘆表現であることは明らかである。この例ではその思惟文の前後に「いとあはれと見て」「あさましながらも」という情意性の語を用いて、思惟文の内容を説明している（表Ⅲ・Ⅳでの調査対象はそういう所まで拡げていない。「かし」「かな」を文末に有する一文の中で用いられた語に限った）。また、情意性の語が「かな」の一文中やその前後に存しない場合でも、文脈の中で総合的に判断して（特に和歌で用いられる「かな」は、多くはその中にも前後にも情意性の語や説明を伴わないが、詠嘆表現であることに疑いない）、「かな」が詠嘆表現以外に用いられた例はない。

以上のことを踏まえ、詠嘆の用法しか持たない「かな」の中で、情意性の有する語を承ける場合が、表Ⅳでみるように、六割から七割近くもあることを考慮しても、「かし」の詠嘆的用法か否かを弁別する際に「かし」の承ける語が情意性を有するか否かを基準とすることは有効であるといえよう。尚、「かし」が情意性の語を伴わない場合も、「かな」のように、詠嘆表現となるものはないかという点であるが、それは「かな」と「かし」との意味・用法上の根幹的な差異に依るものであって、そのような「かし」の例を詠嘆表現とは判断し難い。

また、表Ⅳで対象とした資料における「かな」の例は、会話・思惟の文に用いられたものばかりで、地の文での例はない。その他の資料では地の文に用いられる「かな」もあるが、そこには作者が顔を出しておりかつ発言内容は語り手

表Ⅳ

資料	A	B 宇治拾遺物語
品詞＼語の性質	名詞 動詞 形容詞 形容動詞	名詞 動詞 形容詞 形容動詞
情意性のないもの	御様・大事・月・春・人・仏・夜・我身（2） あり（6）・入る・覚ゆ・返り見る・来・心得・過ぐ・優る・澄む・泣きあかす・成る・似る・見る あし・あやし・多し・かしこし・たのもし（2）・たふとし（6）・つたなし（3）・長し・久し・よし（4） 稀有なり（2）・妙なり・誠なり	牛・男・親・女人（2）・刀・かたみ・声・心ぎは・御房（3）・暦・様・しれごと・しれ者（2）・姿・大饗・太刀・力・使・兵・主（2）・盗人・聖・人・広さ・道・水の色・者（4）・様態・奴（4）・雪・童 飽く・逢ふ・あり・行く・言ふ（7）・いらふ・おこす・仰す・覚ゆ・書く・語る・聞く・来・食ふ・心得（4）・死ぬ・す（3）・優る・立つ・使ふ・告ぐ・作る・つぶる・成る・脱ぐ・宣ふ・見ゆ・持つ・様がり・宿り入る・渡す あぶなし・いふかひなし・多し・奇し・たふとし（3）・強し・見苦し・よし・よしなし（4）・わろし 稀有なり（7）・不覚なり・むげなり・不定なり・希なり・大なり
情意性を有するもの	あさまし・あぢきなし・いみじ・憂し（2）・うらめし（2）・うらやまし・うれし（5）・おそろし・おもしろし・かたじけなし（2）・かなし（13）・口惜し・苦し・心長し・歎かし・なつかし・はかなし・はしたなし・はづかし（3）・惜し（2） あはれなり（4）・おろかなり・幸なり（2）	あさまし（15）・あやし（3）・いみじ（11）・うるさし・うれし（6）・おそろし（3）・かしこし（6）・かなし・口惜し・けやけし・心うし（2）・心なし・にくし（2）・ねたし・まがくし・もったいなし・ゆかし・ゆゝし（4）・わりなし・をかし（4） あはれなり（7）・不思議なり（2）・をこなり（2）・無慚なり・不便なり（2）
用例数	7　43 50/87＝57％	14　66 80/120＝67％

C　浜松中納言物語		
名詞	有様（3）・御かたち・御心・御身・君・心・ことわり・最後・様（2）・栖・契り（2）・月・人（4）・別れ	興あり（2）・まどふ（2）・こがる
動詞	諫む・劣る・おはす・覚ゆ・思ひ立つ・思ひやる・思ふ・聞く（3）・来・知らす・す・優る（2）澄む・尋ね出づ・頼む・濁る・似る（2）・果つ・まよふ・乱る・見あらはす・見知る・見つくす（2）・見とどむ・見ゆ（3）・見る（4）・ものす・別る	あいなし・あたらし・あやし（5）・ありがたし・いとほし（3）・いみじ（4）・うれし（2）・おぼつかなし・かしこし（3）・かたじけなし・悲し・口惜し・くやし・心憂し（3）・心苦し・心強し・心細し・すさまじ・つきづきし・つらし・なつかし・にくし・はしたなし・はづかし・便なし・めざまし・めでたし・らうたし・わびし
形容詞	ありがたし（3）・いふかひなし・うつくし・多し・著し・たぐひなし・たふとし・めでたし・よしなし	あはれなり（5）
形容動詞	むげなり・めづらかなり（2）・優なり	
	5	43　　5
		53/80＝66％

複数の用例があるものについてのみ（　）内に用例数を示す。

自身に向かった詠嘆の用法であって、「かし」の発言内容が相手に向かう「評」としての用法とは質的に異なる。

むすび

和漢混淆文における和文(特有)語の終助詞「かし」は、語形は和文と同一でありながら、語法上は差異がある。改めて

整理すれば、まず、「かし」の意味・用法に「念押し・強調の表現」、「勧誘・希望・命令・禁止の表現」、「感動（詠嘆）の表現」という三種類が存するのは和文における語法であること。次に、和漢混淆文においては、「かし」は「念押し・強調の表現」と「勧誘・希望・命令・禁止の表現」だけを担い、「感動（詠嘆）の表現」は専ら「かな」が担うという機能分担が認められるということである。

更に、情意表現に用いる「かし」についてみると、和漢混淆文においては地の文でしか用いず、それは或る話題や人物・事物に対する「評」としてのみ用いるが（これは詠嘆よりも念押し・強調の用法からつながるものと言える）、一方和文においては地の文でも会話・思惟の文でも用い、従って評としても感動（詠嘆）表現としても用いるという特徴が指摘できる。

以上の考察から考え得ることは、和文（特有）語が和漢混淆文（乃至限定的には漢文訓読文）に受容される際には、和文（特有）語の意味・用法をそっくり採り入れるのではなくそのうちの最も根幹的部分を採り入れる、或は、既に漢文乃至漢文訓読文に和文（特有）語に相当する意味・用法を有する語（や文字）が存する場合には、それ以外の部分を（日本語としての）表現上の不備を補うために採り入れることが行なわれたのではなかろうかということである。

本稿の考察を補うためにも、「かし」における「評」と「感動（詠嘆）」の用法がいつ頃からどのような場において行なわれたかについて、今後考えて行く必要があるように思う。

注

（1）　本稿では次の立場で和漢混淆文という語を用いた。

○「仮名交り文」若しくは「片仮名交り文」といふ名称は、表記について言ったのであって、語彙・語法の内容とは一往無関係であり、これに対して「和漢混淆文」は、和文体と漢文体とが混淆した文体という意味で、専ら言語の内容について名付け

た範疇である。この意味を適用して行けば、所謂「片仮名交り文」は殆どすべて漢文訓読体と和文体との両方を併せ含んでゐるのであるから、これらも含めて「和漢混淆文」と呼ぶことも可能のはずである。〈築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』九一三頁〉

(2) 例えば、副詞「更ニ」には肯定表現と否定表現としての陳述副詞との用法がある。陳述副詞「更ニ」は漢文本来の用法ではなく、極めて和文的な用法であるのに対し、肯定表現に用いられる「更ニ」は特に訓読語としての印象が強い用語であると言われる。

(3) 注(1)文献七〇八頁。

(4) 参照したものは次の通りである。『品詞別日本文法講座』・『研究資料日本文法』・『岩波講座日本語7』・『助詞助動詞詳説』(松村明編)・『平安時代語新論』(築島裕)・「『かし』の研究」(和田利政・「国文学」昭和三四年七月)・「古典解釈のための助詞・終助詞」(森重敏・「国文学解釈と鑑賞」昭和三三年四月)

(5) 注(4)論文において森重敏氏は「かし」の有する意味・用法について触れられた中で「話手が自身の『ことわりにまかせた』発言内容について、主観的にもあれ改めてその正当さを確信しつつ、聞手に対して同意を求めながら訴え、あるいは話手自身に対してみずから再確認する意味」で「一種の感動詞にも近い」意味とされ、更に「話手乃至聞手が話手の発言内容に対して感動詞ふうに『いやはやどうも』といった反撥的な気分を感ずる際に、あるいは冷やかし気味にあるいは照れ隠し気味に」用いられることがあると説明された。この「一種の感動詞」「感動詞ふう」のものは、本稿で整理・要約した一、三のいづれに属するか截然とし難いが、論者は発言内容が相手に向かい「ネ、ソウデショウ。……デハナイデショウカネ」という気持ちで用いられる場合を「念押し・強調の用法」の中のものと考え、発言内容が話し手自身に向かう気持ちの方が強いものの中に感動(詠嘆)の用法があるとして考えた。

(6) 『源氏物語』については桐壺から澪標までの一四の巻を調査対象とするにとどめた。他の資料に比して圧倒的に言語量が多いので限定したが、本稿の考察上支障をきたさない程度の分量はとれたかと思う。この分量で『源氏物語』の中で「かし」が承ける殆ど総ての異なり語(用法上の差異も含めて)を網羅していると考える。

(7) A群の「かな」は「かし」に比べて用例が多いが、「哉」で表記される場合が殆である。漢文訓読文に用いられることの少

ない終助詞の中で、「かな」が数の上で突出しているのは、漢文において「哉」字（或は「矣」字）の用字に情緒表現に用いるものがあったためではなかったかと思う。

（8）注（5）参照

（9）表Ⅲで抽出した「かし」の承ける自立語は一つであるとは限らない。例えば

○御らんずるたびごとに「心にかゝりてゆゝしくおぼつかなく思かたの人ぞかし」とあはれになみだぐましく思さるゝ御心の……〈浜松中納言物語〉

右の例の場合、「かし」は直上に「人」を承けるが、「思かたの」「人」であり、しかも「ゆゝしくおぼつかなく」「思（ふ）」のであるから、「かし」によって強調されるべき表現内容の核として最少限に考えても「ゆゝしくおぼつかなく思かたの人」という一まとまりの〝句〟で見なければならない。従って表Ⅲで拾い出した自立語は、形容詞「ゆゝし」「おぼつかなし」、動詞「思（ふ）」、名詞「人」である。また、その際対象とする自立語は、「かし」を文末に有する一文中に限って拾うこととし、それ以上には対象を拡げない。

（10）「かし」が一文において承ける語が一語だけとは限らないのは前述した通りである。従って表に示された数よりも、ここでの「かし」の用例数は少なくなっている。

（11）森重敏氏の注（4）論文・『助詞助動詞詳説』（学燈社）

［付記］ 本稿は、昭和六二年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会に於いて口頭発表した内容を基に成稿したものである。本稿を成すにあたり、小林芳規先生・佐々木峻先生の御指導と、大森北義先生（鹿児島短期大学）の御助言を賜った。銘記して学恩に深謝申し上げる次第である。